【大学等・一般の部】優秀賞

此処でしか つなげない こころ

宇佐市　吉田　由里子

此処が、嫌で嫌でたまらなかった。
此処からも親からも放れたくて、進学・就職と、あえて県外を選んだ。
あれから時は経ち、今は此処で暮らしている。一人で出ていった故郷に、今度は家族が出来て戻ってきた。
決断の理由、一つは高齢になった母への恩返し。もう一つは、田舎に、女性が気軽に行ける運動施設を開業すること。
二十数年ぶりの故郷は、意外に新鮮で、新しい発見があり充実している。
すでに他界した町職員の父、助産師として病院勤めの母、普通に職業をもちながらも、家の畑作業や米作り、山の作業などを、毎日こなしていた。その多くは、天気に左右されるため、次から次と、作業に追われているように見えた。晴れ間が続く日は、延々と外作業は続き、私が学校から帰っても家は真っ暗。明かりが灯り、美味しい夕飯が並んでるって事は、ほぼなかった。
近くにお店もない。お腹を満たすには、お米を炊飯するか、畑の食材を収穫し、土を落とし、綺麗に洗い、食べられる状態にする大きなストレスの作業が必要で、プリプリいら立ちながら収穫したものだ。
ただ、母は、一生懸命働いていた。
職業を持ちながらも、家の作業をするのは当たり前、自分の為だけに時間を使うということは、なかったように思う。
私は、こんな経験がある。
運動が大好きだったので、良く家の周りを走っていた。ある日、「遊んじょらんで、母ちゃんを手伝わんか」と近所の大人に言われ、悲しい気持ちになった。好きな事が自由に出来ない窮屈さを感じた。
女性も自由に時間が使え、気軽にカラダを動かすことが出来ると心がスッキリするのに、とずっと考えていた。この経験が、女性がストレス発散する場所を作りたいという夢につながった。
そんな私が大人になり、母になり、また此処で生活し始め、子供の頃にはわからなかった事が沢山見えてきた。
地区の行事ごとは、皆で力を併せていた。草刈り・水路掃除等々。老人会・婦人会などの組織もしかり。
自分たちが住んでいる地域を、綺麗に安全にしよう。子供を守ろう。ご先祖様から受け継いだ田畑を守ろう。と、粘り強く淡々と色んな事に取り組んでいる。
そして、その作業が、ただただ、きつい大変な作業のみではなく、達成感や喜びなど、心動かしながらの作業でもあるのでは？と思えるようになった。
田畑を耕し種をまき、芽が出て、収穫し、家族のお腹を満たすことが出来る喜び。
この、コロナ禍にあっても季節は廻り、作物を育てる準備を淡々とこなす高齢者の、何と、力強いことか。
私の夢、女性が気軽に運動出来る場所も、家族、地域の方々のおかげで開業から十三年経つ。
一昨年亡くなった母は、私が此処に戻ったことを、それはそれは喜んでくれた。
田舎が嫌でたまらなかった私だが、此処で一生懸命働き、生活していた父や母の姿から、いつの間にか、粘り強さ・我慢・先祖や高齢者を尊敬する気持ちが身についていた。
このコロナ禍、施設存続も危ぶまれる状況が続いているが、今度は私が、粘り強く、一生懸命取り組む姿を、娘につなげたい。
母の晩年、思うように動かない体で外作業をする姿をみて
「ばあちゃん、すげぇな！」
娘から言葉がもれた。
我が子に、その姿を見せられ、故郷に戻って正解だった。と感じた。